

優しくかしてき

あつきなさげの

同情の涙

袖のおもりし

月に向ひて

虫鳥の音に

世の幸ち人の

我れにはつらさ

まごころの

永劫と

あふれては

こともわりしか

はなに酔ふ

あこがれて

さはげども

歌の曲

### 勇ましき若武者

源

譯

一、誰か敢て此深淵に潜り入る者ぞ、朕は金盃を投げ捨てたり、黒き淵は早やそを鵜呑にしたり誰か朕に彼盃を致すものぞ、わらば盃は以て其者に與へむ。

二、王はかく語りも終へず果しなき大海に突出ぬ。

し峻峭崎嶇たる絶壁の頂より、其金盃を渦まける洪濤の中に投げこみて、再び問ひけらく、……誰か敢て此深淵に躍り入る者ぞ。

三、王の前後左右、騎士若武者の面々、聞き終りて森として水をうつたる如く、唯暴れにわれし大海を瞰し居るものゝみ、誰あつて其任に當らむとする者はあらざりき。王は三たび問ひ給ひぬ、一人奮起するものもなきか、と。

四、されど並み居る人々依然として隻語を發する者もなし、此躊躇せる若武者の一群の中、思ひさや静々と大膽に歩み出でたる一人の年少武者の、あらむとは、彼は早や帶を解き上衣を脱ぎ去りぬ、山なす扈従の面々さては貴女貴婦人など、一切の驚奇の視線は、此花やかなる若武者の上に注がれぬ。

五、斯くて此年少は絶壁の傾斜に歩み出でて、

淵を見下しぬ、怒濤は渦を打込みつ、咆り狂ひて

渦巻は又其怒濤を捲返し、鳴る神の音もといろ

に幽暗の淵に泡だちながら衝突しつゝあり。

六、動揺し、沸騰し、咆哮し、颯然として水火

の相交るが如く、濕れる泡沫は天に迸發し、大浪

の上に又大浪をうちかけて、海より海のわく如く

果しもわかず見えにける。

七、されども暴勢は遂に稍鎮まりて、白泡消え

て、底黒く、開ける裂目は奈落の底に底ひも知れ

ず裂け入りて、渦の漏斗のその中に碎けし波濤の

滔々とすむくが如く吸込まるゝを認めたり。

八、其時年少は眼を閉ぢて其身を神に投げ出し

碎けし波濤の盛り返す此時早く身を躍らしぬ、戦

慄の叫びは四邊にすさましく響き渡りぬ、渦巻は

早や彼の年少を捲き込みて、跡白波と影だも見せず、神秘に其口を閉ぢたりき。

九、深淵の表面は稍静まりて、水底よりグルグ

ルと怪しき響のみして、ブル〜と泡さへ起ちぬ、

並み居る面々、口より口に震へながらに……惜し

き若者よ、無事なれかしと顔見合すに、淵にはグ

ル〜ゴロ〜と續き續きて唸れる如き響さへ聞

えたり、げに氣づかはしくも恐しげなる時の間も

尙如何あらむと心待ちにぞ待たれける。

十、よしや王冠を投げ込みて、誰か我冠を拾ひ

来るものぞ、拾ひ來りし者は冠して以て王たる

べしと宣言せらるとも、此報酬を希ふ者、抑も幾

人ぞや、怒號せる深淵の底に何物の潜匿せるか、

之を見し人の生きて歸りて語りたる者一人もあら

ざるに非ずや。

十一、誠に數多の船舶も急流に捉られて、忽ち深淵に吸込まれ、何物をも嘸み込みし此墓場より、唯龍骨と帆柱とのみ破砕せられながら拗れて突出でつ、流の聲の段一段と清冷となるまゝに、人の耳には層一層と泡だちて聞ゆるに非ずや。

十二、かくて今しも水火相戦ふ如く、掀蕩し、沸騰し、泡起し、颯々として泡沫は天に飛び、限りもなく波の上に波をうちかけ、遠雷の響の如く、幽玄なる層樓に哮へながら顛墜しつゝあるなり。

十三、見よ、其漲れる層樓より豫察すべき白き何物かが高まるを、見る／＼片腕と筆に光れる頸とは裸出したり、満身の精力を鼓して奮勵せる筋を揮つて泳げるなり、若武者は泳ぎ出でしなり、彼は右手に金盃を高くさへげて、喜ばしげに之を振りつゝあるなり。

十四、斯くて長さ深呼吸の後、やう／＼彼は娑婆の光明に再會したり、列座の人を異口同音に雀躍しながら叫びたり、生きたり、出でたり、呑まれざりき、墓場より……渦まける水の穴より唯大膽が彼生きたる精神を助け出したるなりと。

十五、若武者は上り來りぬ、破るゝが如き喝采は彼を取圍みたり、取圍まれて彼は王の闕下に伏して盃を持ちて跪いて之を王に捧げぬ、王は唯徐に其鐘愛し給へる年若き花の如き皇女を顧みたまへば、皇女は命に應じて鮮麗なる醇酒をなみ／＼と溢るるまでに若武者のさへげし其の盃に充したり。

十六、大王萬歳といとおごそかにほぎ奉りて自らも其身の恙なかりしを心に祝しぬ、誰か斯かる燦爛たる薔薇の光の如き境遇に呼吸する者ぞ、さ

れど斯かる境遇の下こそ戦慄すべきもの潜めるなれ、誠に人間は神怪を窮むべきものに非ず、決して決して、神怪が暗黒と怪怖とを以て親切に隠蔽したるものを窺はむとすべきものに非ず。

十七、電光の如くに引込まれ、己は岩石の堅坑より激流の泉に向ひて暴くすごかれながら顛墜し茲に縦横二重の暴怒せる勢力に巻き込まれ、獨樂の如くに此身を眼くるめくまで回転せしめられたれど、何とも抵抗するを叶はざりし程にて候ひき。

十八、最も戦慄すべき危急に際して我知らず念じたりし神は、淵の底より突き出でたる岩の暗礁を默示し給ひたれば、己は神速に之に取付きて、やうく虎口を逃れたり、而かも又其處なる尖れる珊瑚樹に金盃の懸り居たりしぞ、げに幸の極み

なれ、否ずば盃は底ひなく落ち行きしならむを。十九、己が取すがりたる暗礁の下に、尙幾千尺となく黒紫の幽暗なるのみ、耳聾つれば永久に眠れる如く、身震ひしながら瞰せば鯢の如く龍の如く、恐るべき地獄の底に激動しつゝ、あるものも候ひき。

廿、其處には、刺鋭き鯨魚、鐵槌の恐ろしく出来損ねたる如き大口魚など恐しくも混沌の中に凄愴なる堆積となりて眞黒に動き、海の狼とも喩ふべき身の毛もよだつ鯨など獐猛なる牙を鳴らして脅迫致し居候ひき。

廿一、己は其處に懸りて、凄絶の怪物の側に、夢にも人語の響たにあらぬ愴絶の寂莫の中に、唯一人水底深く人の助けより遠く離れし我身の上に見たりし其際は、流石に恐しなどいふばかりなく

候ひさ。

廿二、さても己は匍匐しながら、そを考へて、百の關節一時におのゝきて、今にも呑みつくされん心地して、恐れに狂ひに思はずも、手放したるは彼珊瑚のからまりたる枝、轟々と渦は忽ち己を攫み去りたり、されどそは己には恙もなはず、却て己を上の方へと引放したるにて候。

廿三、王はいたく驚かれたる面持にて、更にいひ給ふ、其金盃は汝に與へん、汝若更に一度探險して大洋中の深底の消息を齎さば、此寶石を以て飾りたる指環を汝の物とせむと。

廿四、さすがに優しきは女心なる哉、皇女はそを聴き終りて、愛らしく口ごもりながら懇願したまひける、やよ父上よ、そは餘りにつれなき御遊興に候はずや、彼若武者は既に何人にも能はぬ役

目を遂に果て候ひしに、御所望の尙飽かで思召さば、あはれ彼若者は恐らくは他の騎士の面々より嫉を受くるとも候はむと。

廿五、此時早く彼時遅く、王は盃を手にとりて渦巻の中に投げ込みて、いひ給ふ、汝若し彼盃を再び朕に致さば、汝は朕の拔群の騎士たるべく、且つ今汝の爲に柔さしき同情を以て懇願せし我此愛娘を汝の室として行末永く汝に托せむと。

廿六、神來の勢力は彼若武者の精神を捉へたり、そは彼の眼に勇ましく輝きて現れつ、彼は麗はしき花顔を見るときはなし見返りて顔赧らめぬ、皇女は色蒼さめて見送りつさしうつむきぬ、此時既に若武者は、此高貴なる榮譽を夢みつゝ、生命と努力とを暗して、黒淵めがけて真逆様に跳り込みけり。

廿七、眞に人々は波濤の洶湧するを聽きたりき

實にその洶湧のはねかへすをも聞きたりき、雷の

如き響は其洶湧を報告したるなりき、其處に愛ぐ

るしき眼もて、身をかゝめて一心不亂に氣づかは

しげに瞰下しつゝ、あるは、皇女なりき、返り來れ

り、水は、凡て湧き返り來れり、誠に水は潔々と

して下りつ又沙々として高まり來りつれど、而か

も、彼若武者をば再び捧げ來らざりしなり。

この一篇先月日本赤十字社總會に出張の節式の始を待つ間に  
鉛筆もて、手帳に起草したるもの、其儘に打ち捨てんもさす

かに惜しき心地のせらるゝまゝ、寫し取りて御覽に入れ候

相賀調雨

袴の贊

袴よ袴、汝三尺未滿の身を以て、日本赤十字社の  
總會に列り、我國固有の禮服を代表して、燕尾服

フロクコートに取て遜色無きは、予の敬服する所

なり、しかのみならず年立かへるわしたの廻禮に

も汝が随伴せざれば吉例を欠き、太郎が五歳の祝

ひも汝の名を冒さねば、千歳飴も配り榮えせず、

鶴が岡の社頭に源廷尉を追慕し、右幕下の權威に

媚ざりしは靜御前が節操の舞ひ袴、少しく裾は截

り飛ばされても、供不戴天の仇を討とめしは、無

三四が至孝の曠れ袴、年男の袴には鬼も恐れては

しり、五人囃子の袴揃ひは雛壇に笑顔を競ふ、春

の日の永きも鞠袴には暮るを惜み、番袴はかぬ日

は却て内職の楊枝に闇がし、露にもめげぬは駕籠

脇の股立ち、襷積の正しきは裁縫師の敏腕、花笠

へ贈る結納は、必袴地を筆の首めとし、年の尾の

進物には牛蒡にも袴を着せたり、袴よ袴笑ふ勿れ

汝が片々の穴に兩脚を突き込み施主の列にふく